慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「日本釋名」森立之書入れ本について:附「言元梯」「和訓六帖」
Sub Title	
Author	関場, 武(Sekiba, Takeshi)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication	1985
year	
Jtitle	三田國文 No.3 (1985. 3) ,p.45- 66
JaLC DOI	10.14991/002.19850300-0045
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara _id=AN00296083-19850300-0045

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「日本釋名」森立之書き入れ本について

附「言元梯」「和訓六帖」――

なわちこれは、晩年益軒と号し、その軒号で世に知られる貝原篤信 こゝに和綴の半紙本三巻がある。題して「日本釋名」と言う。す

の古書にもとづき、和音五十字をかんがみて一書をあつめ、名 劉熙がしるせるふみにならひ、日本紀・萬葉集・順和名抄以下

二・字書類が説くように、 したもの(同書・自序)。而してその内容は尾崎雅嘉の「群書一覽」

づけて日本釋名と

て、和訓の義を釋。 天象、時節、地理、宮室より、衣服・雑器、虚字等にいたるま

したものである。元禄十二(一六九九)年に成り翌十三年に刊行さ

林。貝原篤信。同好古なり……右の人と轉学によつて。その述れ、からないととなった。 まつば年和国の故事に骨を折和書をあまた述らるゝ人ハ。松下見れた本書は、梅薗堂都の錦の言によると

も白人のためにおもしろからず。又初学のものハ和書をみる事 るところ、見識一段高し。かるがゆへに、假名書の文といへど つめられし和尓雅。歳時記。和漢事始、これらハ賣やすきもの ぬし遠くして賣かぬるこそことへりなれ。その中に貝原氏のあ まれに。中より上の学者ならてハその書をみず。さるによつて

関

場

武

印本の一つである。まず書型を記す。 辰之歳(十三年)京師書林長尾平兵衛の刊記を有する本およびその後 印本が流布する。こゝに取りあげる丹澤文庫本も、その多くある後

り」)、書肆の側からすれば売れ行きがあまりかんばしくなかったも

ということになり(「元禄大平記」巻六一二「皆歴さの作者なりけ

ののようであるが、現存するところそう稀なものではなく、元禄庚

半紙本 三巻三冊 (原装) 海老茶色地紙に卍つなぎ・雲紋艶出し模様。竪2・4、

15 25 糎。

と大きく題を記し、右に「貝原先生編」、左に「皇都書房見返し 上巻前見返して縦に三ツ割りにし、中央に「日本釋名」見返し 上巻前見返しを子持ち枠で囲み、その中を真中の欄が広と各々別の書体で書名を印す。竪16・3、横3・5糎。題簽 表紙左肩。子持ち枠付短冊形白紙に「日本釋名 上(中、下)

「一にない」に近しっ。
「一にない」と出す。瑞錦堂とは享保から文久年間にかけて
瑞錦堂蔵」と出す。瑞錦堂とは享保から文久年間にかけて
瑞錦堂蔵」と出す。瑞錦堂とは享保から文久年間にかけて

日本釋名下」。
内題〈上〉日本釋名 貝原篤信編輯」、〈中〉日本釋名中」、〈下〉凡例 日本釋名凡例」。 目録題 日本釋名目録」。 「日本釋名序」と題する。

凡例 〇一(~六)」、日本釋名目 〇一」、日本釋名 上寸付を記す。〈上〉日本釋名序 〇一(~三)」、日本 釋名柱刻 上方に書名と巻分け等を出し、下方に〇を置いてその下に尾題 日本釋名(中)終」、日本釋名下巻終」。

第二十六丁から「人事」門が、下の同二十九丁から「武具」巻上の本文第二十四丁から「宮室」門が始まり、中の本文卅~六十終」、日本釋名中 ○廿六」。〈下〉日本釋名下 ○一(~廿八、四」。〈中〉日本釋名中 ○一(~廿五、廿七~五十八終)」、四一(~廿三、廿五~四十三終)」、日本 釋 名 上 二 ○廿〇一(~廿三、廿五~四十三終)」、日本 釋 名 上 二 ○廿

門が始まることを考え合わせると、あるいは三巻六冊立て

の構想があったか。

七丁半(同)、〈下〉六十丁半(うち奥付半丁)。 丁数 〈上〉五十二丁半(終丁ウは後見返しに貼付)、〈中〉 五十

匡郭 四周単辺。竪約17・7、横約13・3糎。 業した田中屋治助の発兌本である。

禄十三年版の後印本の一つで、嘉永~慶応年間を中心に営

けて語釈を始める。 本文 毎半葉九行。見出し項毎に改行し、見出しの下一字分を空

印を捺す。

備考 刷り悪し。虫食い中巻ノドの部分に少しあるのみ。原装の備考 刷り悪し。虫食い中巻ノドの部分に少しあるのみ。原装ので書き入れがあり、朱で仮名違いの訂正や傍線を施していて書き入れがあり、朱で仮名違いの訂正や傍線を施している。右上りのくせのある書風よりして、小口書きを含めする。右上りのくせのある書風よりして、小口書きを含めすべて森立之の手になるものと認められる。

まで、右にその書型の概要を示した「日本釋名」は、上巻を天象と地名までの五類、中巻を水火土石金玉~介類の九類、下巻を米数の丹澤文庫本の場合、その一割弱、九十七項に、福山藩の阿部家のの丹澤文庫本の場合、その一割弱、九十七項に、福山藩の阿部家のの大澤文庫本の場合、その一割弱、九十七項に、福山藩の阿部家のの大澤文庫本の場合、その一割弱、九十七項に、福山藩の阿部家のの大澤文庫本の場合、その一割弱、九十七項に、福山藩の阿部家の中医で、のち江戸に出て医学館の講師となり、医学、とりわけその書き、のちば、大学を大象と、右にその書型の概要を示した「日本釋名」は、上巻を天象と、右にその書型の概要を示した「日本釋名」は、上巻を天象と、右にその書型の概要を示した「日本釋名」は、上巻を天象と、右にその書型の概要を示した「日本釋名」は、上巻を天象と、

表のであいる。 を直して「ヒ」「ひ」としたりしている。また天象一一16「水」、時で直したり、凡例五才第六項中の「錢」や「紫菀」の「イ」「い」で直したり、凡例五才第六項中の「錢」や「紫菀」の「イ」「い」で直して「ヒ」「ひ」としたりしている。また天象一一16「水」、時を直して「ヒ」「ひ」としたりしている。また天象一一16「水」、時を直して「ヒ」「ひ」としたりしている。また天象一一16「水」、時を直して「ヒ」「ひ」としたりしている。また天象一一16「水」、時を直して「ヒ」「ひ」としたりしている。また天象一一16「水」、時を直して「ヒ」「ひ」としたりしている。また天象一一16「水」、時でで直した「ヒ」「ひ」としたりしている。また天象一一16「水」、時に直したり、凡例五才第六項中の「錢」や「紫菀」の「ソ」の傍にです。大門のエーターにはいる五十字回とはいい、次にあげる墨筆による書き入れは、立之の考えをより直でないが、次にあげる墨筆による書き入れは、立之の考えをより直接のです。大門の大門の大門の「大門」として重要である。

門のうち十二門にわたり、項目数で言えば十二門六百十六項のうち翻刻にあるように、立之の暴筆書き入れは、「日本釋名」二十三

ものの三通りがある。

「言」は各々内数で「和訓六帖」「言元梯」をさす)釋名」の項目数、()内が立之の墨筆書き入れのある項目数、「帖」る。今、それぞれについて数値を示すと(最初にあげる数が「日本介する「和訓六帖」「言元梯」を引くものが十六と三、計十九 項 あ

七十項目についてあるということになる。そしてその中に、後で紹

もの、「案」とするもの、何もなしにすぐに自説を書きつけている も三次にわたってなされたものと推測される。また「和訓六帖」「言 記してある場合もある。また、筆勢等よりして、書き入れは少くと ことが多いが、一―14四、15家、17霙のように、本文の末や左脇に の如くである。書き入れの位置は、該当項目の上欄、匡郭外である の題によったものか。立之自身の説は、はじめに「立之案」とする 占」、「元梯」のような省略形を採る場合もある。木十七 ― 88 榎に 「元言梯」とあるのは、単なるまちがいか、それとも底本前見返し 元梯」の書名は、題名のすべてを記す場合 も あ れ ば、「六帖」「六 十二、雜器 九八(一〈帖一〉)、二十三、虚字 一〇九(五)(一)、二十、文具 一二(〇)、二十一、武具 四一(〇)、二 品七三(〇)、八、形體七一(〇)、九、人事一〇〇(〇)、 五、地名四〇(四)、六、水火土石金玉二二(一)、七、人 二三 (一)、十三、魚類 二四 (七)、十四、介類 一〇 (二)、 十、鳥類 三一 (〇)、十一、獸類 二三 (〇)、十二、蟲類 ○(四〈言一〉)、十八、飲食 一八(○)、十九、衣服 三二 十五、米榖 二四(〇)、十六、草 六四(〇)、十七、木 七 〈帖八〉)、三、地理 八三(五〈帖四〉)、四、宮室 四七(二)、 一、天象 四〇(一八(帖三、言二))、二、時節 五〇(二)〇

47 -

引きあいに出されるものである。しかしながら「和句解」、契沖の「円珠庵雑記」白石の「東雅」、等と並び、よく原に有名で、鎌倉期経尊著すところの「名語記」、江戸期の貞 徳 のところで右の「日本釋名」は、日本語の語源を記した書物として

和語をとく事、謎をとくが如し、其法訣をしるべし、是 を と

くに凡八の要決あり

の原理を説き、またとして、自語・轉語・略語・借語・義語・反語・子語・音語の八つ

はじめの説をよしとす。此書の内、和語をとくに、二、三説をあげたる所多し、大やう

という記述方式や語源研究に際しての諸注意を示している凡例部分という記述方式や語源研究に際しての諸注意を示している凡例部分という記述方式や語源研究に際しての諸注意を示している凡例部分という記述方式や語源研究に際しての諸注意を示している凡例部分という記述方式や語源研究に際しての諸注意を示している凡例部分という記述方式や語源研究に際しての諸注意を示している凡例部分という記述方式や語源研究に際しての諸注意を示している凡例部分という記述方式や語源研究に際しての諸注意を示している凡例部分という記述方式や語源研究に際しての諸注意を示している凡例部分という記述方式や語源研究に際しての諸注意を示している凡例部分という記述方式や語源研究に際しての諸注意を示している凡例部分という記述方式や語源研究に際しての諸注意を示している凡例部分という記述方式や語源研究に際しての諸注意を示している凡例部分という記述方式や語源研究に際しての諸注意を示している凡例部分という記述方式や語源研究に際しての諸注意を示している凡例部分という記述方式を記述方式をいる。

として既にして喝破されているくらいである。松永貞徳の「和句解」うたがひをゝけれど、事繁けれバ虚におぼえず。

立之研究その他に些少の資料的価値もあろうかと、翻刻を提出するある。紙幅の都合上、細かい考察は他日を期すとして、今は、ただ点もある。それにつられてか森立之の書き入れも残念ながら低調でいぶかしんでいる「神代直指抄」を援用する部分が目だつなどの欠によった部分がありながら、それを明確にせず、これまた都の錦がによった部分がありながら、それを明確にせず、これまた都の錦が

四

のみである。

ものである。まず「言元梯」から紹介する。十月刊)の改顕後印本で、弘化三(一八四六)年三月に刊行された帖」は、二本松藩の儒官服部大方の手に成る「名言通」(天保 六年的」は、二本松藩の儒官服部大方の手に成る「名言通」(天保 六年の編で、天保五(一八三四)年十二月に刻成しもの。後者「和訓六帖」さて、森立之が書き入れに利用している「言元梯」と「和訓六帖」さて、森立之が書き入れに利用している「言元梯」と「和訓六帖」

は便宜上すべて「ね」の中の一項として数えてある。

目の多いのが特徴と言え、簡単すぎてが、「日本釋名」や後述の「和訓六帖」に比すと、説明の簡単 な 項内容の一端は、本稿末に付した翻刻部分からもうかがい知れよう

・38)、味 甘美、甘美 妙 (う・1~2) 精 細 、愛 妙、妙 甘美、細 愛 (く・1~4)、細 小間所 (と精・細・変 妙、妙 甘美、細 愛 (く・1~4)、細 小間所 (と

こうだろう二堂をひだり句になって、

る。なおというぐあいに堂々めぐり的になってしまっている点も 散 見 され

喜勢留 烟吸ル、銀杏 黄子甘、義耶万牟 火和(き・78~80)

いが、参考までに手近にある@®二本によってその書型の概要を示等は御愛敬であろう。以下、諸本の調査が済んでないので心もとな

大本 一冊

しておく。

題簽 ③本によると、表紙左肩、子持ち枠付雲母引短冊形白紙。表紙 縹色布目地紙。竪25・5、横17・8糎。

前見返し ③黄紙。単太枠内を、真中の欄が他より幅広くなるよ「言元梯 完」。堅17、横2・55糎。

と記す。®本は、雲母引淡黄白色紙。枠は子持ち枠。中央げ、右に「大石千引先生著」、左に「天保甲午﨟月 刻 成」

うに界線で縦に三ツ割。中央に「元言梯」と大きく題を掲

内題

言元梯」。次行左下方に「新武葛飾

大石左衛門源千引著_

と記す

刊記

○後見返し単枠内。上方に「發行書林」と記し、下方に

衛/江戸日本橋通壹丁目/須原屋茂兵衛/同日本橋通四丁/須原屋平左衛門/大坂心齋橋通北久太郎町/河内屋喜兵「京都寺町通松原下ル/勝村治右衛門/同富小路三条下ル

版であろう。®は刊記ナシ。 「個し後印のものかと思われる。公本は即ち須原屋佐助堂須原屋佐助」の三都五軒の書肆名と所在地を列記する。但し後印のものかと思われる。なお奥付の前に「臨時客應接」「截縫早手引」の内容紹介を行なっている金花客應接」「截縫早手引」の内容紹介を行なっている金花客應接」「複雑早手引」の内容紹介を行なっている金花客であるう。®は刊記ナシ。

壹(~陸)」、「言元梯 一(~六十三)」。 ®本には跋が三柱刻 白口。序および巻末広告部分には無し。「言元梯大略

の丁付のみ。最後のものに「言元梯跋 一(~二)」とあ種あるが、はじめのものには柱刻無く、二番目は一(~三)

行数 本文毎半葉十行。割り注あり。字数 一行十三字。序跋とりは空白)、跋六丁〉。の八十一丁〈序六、大略六(12中は空白)、本文六十三(75)数。公七十五丁(但し12中、75中は空白)に広告一丁と奥付。

本文の五十音分けの標目、③本の巻末広告をのぞき漢字片

横約12・5糎。 広告や奥付・前見返しをのぞき無し。字高

竪約19・5、

匡郭

仮名まじり。

まじり文。天保三年正月はしめ。まなひ子 池田貞時)。②備考 前述の如くB本に跋文が三つある。①言元梯跋」(平 仮 名

— 49 **—**

原千清謹識)。 ③言元梯跋」(漢文体、天保五年秋七月邨井又玄藤 題ナシ(和文、漢字万葉仮名表記。文政十三年正月田澤仲

書はその頃の成立にかかるものか。十三庚寅年十一月廿五日「野乃舎老人識」と刻す。即ち本なお巻頭序文の後に「言元梯大略」あり、その末に「文政

五

る。まず左に各々その一本による書型を記す。と和泉屋吉兵衛の広告にうたう服部宜著「名言通」の改 題 本 で

あ

〈本 二巻二冊(原装)

A、名言诵

題簽 単枠付短冊形淡香色紙。表紙左肩。「名言通 上(下)」。竪25・8、横18・15糎。竪25・8、横18・15糎。

竪 17

65 65

横3糎

序題 ①名言通序」(癸巳孟夏 松崎復撰)、②自叙」(天保 六年経に三ッ割にし、中央に大きく「名言通」と出し、右にはない。 中央に大きく「名言通」と出し、右ににない。 山吹色紙。上方に「天保乙未新鐫」と右横書き。その前見返し 山吹色紙。上方に「天保乙未新鐫」と右横書き。その前見返し 山吹色紙。上方に「天保乙未新鐫」と右横書き。その前見返し 山吹色紙

内題 名言通上(下)/信濃 服部宜著/男 厚校」。 乙未春二月望 服部宜識)。

(~四十八)」。〈下〉名言通□○巻下 □ (~五十三)」。 巻上 □ (二)」、五十音説 ○ (~五)」、名言通□○巻上 □ 柱刻 〈上〉松序 一(~三)」、自叙 一(二)」、凡例 一

尾題 名言通上(下※)」。 末広告三丁分および奥付には柱刻ナシ。

田佐助/同芝神明前/和泉屋吉兵衛」と記す。なお本文末、心齋橋通安堂寺町/秋田屋太右衛門/江戸両國吉川町/山・一次齊橋通安堂寺町/秋田屋太右衛門/江戸両國吉川町/山・一条十月/書肆/京三条通松原下ル/勝村治右衛門/大坂・山川/日本風土略 推薦國考古今華 近刻」、左に「天保六乙未刊記 単太枠内を界線で縦に二ツ割にし、右に「名言通次編刊記 単太枠内を界線で縦に二ツ割にし、右に「名言通次編

関和泉屋吉兵衛であると見てよかろう。の広告を記す。上巻前見返しの表示と合わせ、版元は名山の広告を記す。上巻前見返しの表示と合わせ、版元は名山芝神明前 和泉屋吉兵衛)」三丁分があり、計47点の 書物刊記の前に「名言通」を含む「書林名山閣藏板目録(江戸

国郭 単辺。堅18・6、横12・92糎。大ン本文五十三、広告三、奥付半丁、計五十六丁半。大数 有界九行。注は双注、反切は多く陰刻。

— 50 -

和訓六帖

濃縹色布目地紙。竪25・6、横18・5糎。

単枠付短冊形白紙。表紙左肩。 「和訓六帖 17・25、横2・95糎。 上(下)」。

堅

前見返し(A本と同版。但し上方にあった「天保乙未新鐫」と右 にあった「二本松」を削り、中央の題「名言通」を「和訓

丁数

元である。

序題 ①の松崎復の漢文体序の題を「和訓六帖序」と改刻。但し 文中にある「名言通」の書名はそのまま。②の「自叙」は

六帖 全二冊」と改刻してある。

内題 書名・巻分けのところだけ改め、「和訓六帖上(下)」とし 全文削ったものか、手もとの本には見当らない。要再考。

柱刻 書名の「名言通」の部分を削る。

てある。

を、その前の丁、最終行本文末に移し(各々改刻)、天と 上巻は、「名言通」上巻終丁にあった項目数の表示と尾題

〈上〉「上終」とのみする。紙数節約のためか、「和訓六帖」

数がAに「天人凡一千百六十三名」と示してあっ たもの 人の分類の意義についての一文を削除してある。なお項目

刊記 その左に「書房」と右横書き、その下に「京都三条通舛屋 単太枠内の右に「弘化三年丙午季春完刻」と大きく出し、 しまっている。〈下〉「和訓六帖下終」と改刻。 「和訓六帖」では「天人凡一千八百六十三名」として 出雲寺文次郎/大坂心齋橋通安堂寺町 秋田屋太右衛

門/同心療橋通北久太郎町

河内屋喜兵衛/同心齋橋通博

榑正町 る。すなわち「名言通」と同じく名山閣和泉屋吉兵衛が版 日本橋通二丁目 /同同所 同茂兵衛/江戸日本橋通一丁目 同半兵衛」の十名の書肆の所在地と名前を列記す 和泉屋吉兵衛梓/同本町三丁目 山城屋佐兵衛/同芝神明前 須原屋茂兵衛/同 同善兵衛/同 岡田屋嘉七

本にも無いものか要調査。〈下〉本文五十三(但し終 丁 ウ を精査していないので、「自叙」および「五十 音 説」が他 〈上〉序三、凡例二、本文四十七、計五十二丁。但し諸 本

は「名言通」にあった漢文体の跋文が削除され、 となっている)、奥付半丁、計五十三丁半。

罫線のみ

行数

「名言通」に同じ。

匡郭 単辺。竪18·55、横12 9種

ての出版である。 右に示した相違点をのぞけば、 A本と同一の版木を使用し

について見ると、凡例に ことになる。而してその内容は次の如くである。まず配列や項目数

すなわち、B「和訓六帖」はA「名言通」の改題・後印本という

金石草木トハミナ天ニ属シ、鳥獸蟲魚ハ人ニ属シ(中略) コノ書、物名・言語分テ上下トシ、物名ハ天・人ヲ分チ、

部と人部に分ける。そのうち天部は、その標目の下に「總11土及 金 とあるように、上巻を物名、下巻を言語の二つに大別し、物名を天 ハ別ニ五十音ニ分チ、捜索ニ便ス

石草木」とある通り、〔天〕 ~木類の六類に分け、試算によると

「天」一一六、土類四九、金五、石五、草一五〇、木類九七

語為、外鳥獣蟲魚属、比一とある如く、「人」と魚類の十三類から求りり)の見出しを立てている。そして人部は、同じく標目の下に「言の計四二二項(本文末には「通計四百二十三名 所ュ属不ュ第」とあ

食二三、衣服附褻器四六、宮室六七、器用舟車雑具附一八九、鳥語為よ外鳥獸蟲魚属よ此」とある如く、「人」と魚類の十三類から成り」の見出しを立てている。そして人音に「同じく根目の丁に「言い」の見出しを立てている。そして人音に「同じく根目の丁に「言い」の見出しを立てている。そして人音に「同じく根目の丁に「言い」

の計七三六項(本文末には「通計七百四十名)所、属不、第」とあり)類五七、獸類三四、蟲類三三、魚類七三

ア部五十、附三七、イ部五○、附二八、ウ部四四、附一八、エを立て、語源その他を説く。また下巻は言語門のみで

附三、ヲ部一三、附九

行(ラ、レ、ロ)附のみ八、ワ行(ワ、ヰ、ヱ、オ)六八、附二八附四八、マ行八三、附五二、ヤ行(ヤ、ユ、ョ)三四、附三三、ラ一〇、附八九、タ行一四〇、附八二、ナ行七九、附四五、ハ行九八、という具合に、ア行一六〇、附九五、カ行一四五、附七三、サ行一

節数順配列となっている。また同じく凡例に「物名・言語、文字ナ「新」~50 「 暖 」が四音節語というぐあいに、所謂早引節用風の音が記~9 「涸」までが二音節語、10 「新」~32 「炙」までが三音節、33 を収載する。そしてこの言語門は、凡例に「言語、字數ニョル」とを収載する。そしてこの言語門は、凡例に「言語、字數ニョル」とを収載する。そしてこの言語門は、凡例に「言語、字數ニョル」とを収載する。そしてこの言語門は、凡例に「言語、字數ニョル」とを収載する。そしてこの言語門は、凡例に「寄名・言語、文字ナイ)が、所二八の計九一七、附五五三、かの計九一七、附五五三、かの計九一七、附五五三、かの計九一七、附五五三、がの計元、所二八の計元、方、「一、所二八の計元」となっている。また同じく凡例に「物名・言語、文字ナーの計九一七、附五五三、方、「一、所二八の計元」という。

終りに、和外漢助辞、

キモノ、類、

雅俗トモニミナ、五十字毎字ノ下載セテ附 ト ス」「内

亦以テ附トス」と言う如く、

各々の部

大要ヲ用ヒ、

カヂヤフニモアナ、アイ、アテ、アナタ……アンチウコツタ、アヂヤフニ

は、本稿の末に記した「日本釋名」の翻刻(抄)を参照 された いれているので、実際の収録語彙数はもっと多い。その内 容の 一端 巻末には「名・言合二千六百三十二」とする)わけである。しかし 巻末には「名・言合二千六百三十二」とする)わけである。しかしきない、下巻37オ上欄外に「アカ」48ウに「キセル」等の説明が記されていたり、本文解説中に見出しとして立てられている(原本下巻を合わせて計二六二八項が見出しとして立てられている(原本下、いずれにしても「和訓六帖」すなわち「名言通」には、上巻と下いずれにしても「和訓六帖」すなわち「名言通」には、上巻と下

る。二、三例をあげると 「 実際の収録語彙数はもこと多い。その内 名の 「 端に 、 本稿の末に記した「日本釋名」の翻刻(抄)を参照 さ れ た い は、本稿の末に記した「日本釋名」の翻刻(抄)を参照 さ れ た い は、本稿の末に記した「日本釋名」の一番

ボウシ古クツノーボウシト云フ、又ウツクショシナドモアリ、 ラゼミハ声ミン~~ト云フガ如シ、 物多ク松ノ木ニ取ツキ鳴ユエ也、ヒグラシハ、日クレス、シキ ナドニテ云フセミノコ、或ハ別ニソノ名アリ、 ニ、力セミトス、ツク~~ボウシハ、コレモ声ナリ、 ハ、ソレヲ松虫トスル処アリ、 乗メ鳴ク、 ソノ鳴声ナリ(田舎ニアリ、声セミノ~ト云フガ如シ、 カツタゼミトモ云フ、 秋ノ松虫トヒトツ名ナリ、 力ヲ入ル・ヤフニ聞ユル故 カツタハソノ声ナリ、 山陽諸国ナドニ ツクく ソノ チカ 京

--- 52 -

頃出テ鳴ク、ソノ声尋常ノ蟬ニ似テ少シ差アリ、コノモノ、蟬 末ニハツクリンギヤウシト云フガ如シ、ハルゼミハ、春三月ノ スル也 (巻上・物名・人部・蟲類18) セミトモ異リ、按スルニ山民或メウチント云フ、ソノ声ヲ妙ト / 〜ゼミアリ、チイノ〜ハソノ声ナリ、二三月出テ鳴ク、ハル セミ鑵也、ソノ声ジヤン~~ト云フガ如シ、故ニ云フ、又チイ フラキ、シニ、ソノ処ニカナセミト云フアリ、カナセミハカネ ノイチ早ク出ルモノ也、凡セミノ類又種々アリ、予西藩ノ人云

アンチウコツタ 安房人ナトノ詞、ガニトイフコトナラン也、 (巻下・言語・ア部・附12) アシラフ 京人應接ヲ云フ、 ァハメル也、アハ反ア、ル 延ラフ 亦嗟賞

にかかるものであるというわけではなく、 の如くである。もとよりそれらの説は、すべてが著者服部宜の独創

スル意ナリ (同30)

本居宣長、荒井田久老、谷川士清、橘千蔭、コノ數人ノ説、尤 アリテ、辯論煩シキニヨル、中ニ僧契冲、荷田東満、加茂真淵、 前人ノ説取用ルモノ、必シモソノ名ヲ載セス、或ハ取捨スル処 多ク取用ル処ナリ、又物産家一二有名ノ士ノ説亦然リ

を出す計画があったらしいが、詳細は不明である。 及方言俗語、書中略スル処、次編トス」と言っているとおり、次編 モノ)等もあり、典拠その他について今後検討を 要 しよ う。なお レロく〜)や、井澤長秀の「本朝俚諺」を引いている場合(ヲコノ 原好古の「諺草」の説を批判している場合(巻下、インノコくく、 と凡例に述べているように、諸説を勘案している面も見られる。貝 「名言通」奥付に「名言通次編 追出」とあり、凡例でも「古語

翻翻

刻

凡

一、丹澤文庫所蔵の森立之手沢本「日本釋名」を底本とし、立之 れを掲出した。またその書き入れに「言元梯」や「和訓六帖 の書き入れのある項目のみを翻刻し、※印の下に立之の書き入

一、翻刻に際しては、字体を概ね通行のものに直したほか、私に 改行、句切れを施し、字配りも適宜変えてある。引用項目に付 の名が見える時は、各々の書の該当部分を次に併出した。

一、原文翻刻の末に我流の覚え書き風の略注らしきも の を 付 すべき文献を使用せず当然あるべき個所に注が無い等、種々の だいた相原一・石川俊一郎、平沢五郎の各氏に、深く謝する次 ある。また「万葉仙覚註」、「言元梯」閲覧にあたり御世話いた 十二分に注意せられたい。なお今後補訂作業を行なうつもりで 破綻を露呈していると思われる。したがって、参看に際しては した算用数字は、私につけた項目番号である。 つ忽卒の間に作成したメモであるから、誤りもあろうし、参照 た。文献の引用の仕方や注の設定もかなりに恣意的であり、か

翻 刻

第である。

天地 あめの反字へゑ也、ゑハひらくかな、陽也、つちの反字ハち(上一、天象・1)

語と云、神代直指抄に曰、本朝最初言語音聲の初に、あめと云て、也、ちいとづるかな、陰也、あめつち皆上古の時の語也、此類を自(注2) たかき義たふとき義を取り、 3義いやしき義を取て、 陰道をあらはす 陽道をあらへし、つちといふハ、ひき

消ちあり)ナリ、チハヒチノツマリ也、即閉土ノ義ナリノ反リメナリ」、 のこの これが ままま (**) アテノツハ、トヂルノ義、トチノ反(一字分 テアメト云ヒ、地ヲサシテツチトイフナリ、アメノアハ、アフ テ最明徴トス、地ニ在ルハ、土ヲ以テ最明徴トス、故天ヲサシ ※案、アメハ雨ナリ、ツチハ土ナリ、物ノ天ヨ降ルハ、雨ヲ以(**) ノアニテ、上ヨリノ義、メハ、ミツ也、ウハノ反リア、ミツ

(同・2~4)

訓也、是又自然の語也 陰 みと訓ず、柔かなな ** ぎと訓ず、剛き意也 みと訓ず、柔かなる意也、又めと訓ず、女也、ぎみは陰陽の本ぎと訓ず、別き意也、又おと訓ず、男也

るべし

かみは上也、かみに在てたふとむべし、直指抄に見えたり、又

号ハ有べし、上の字の正訓をとらずして、鏡を取て附會する、すべず しき由、直指抄に見え侍る、鏡のいまだ出来ざる時、すでにかみの 陰陽の和訓をぎみといふ、かときと相通なれば、陰陽と云意も有べ し、神ハ陰陽の霊なれば也、鏡の中のがの字を略せりといへる説あ

※案、今俗語、ギミガマト雑言争論スルナドイフコアリ、盖ギてかやらの類、皆ひが事也 ミガマハ陽陰神ノ轉ニテ、 白シトイへハ黒シト云、剛トイへハ

柔ト相争フノ義ナランカ

天地はしめてひらけし時より、すでに日あり、是自然の語なる

からす 日より出たり、日は母語也、ひるハ子語也、子語を以母語をとくべれバ、日の訓をかりて火をひといふなるべし、ひるといふことばハれバ、日の訓をかりて火をひといふなるべし、ひるといふことばハ にあたりて物ひるなり、此等の説、用ひがたし、日は上古の自語な べし、或説、日ハ火の精なるゆへに名づく、又ひると云説あり、

天日ノコニ用ヒ来レル也、彼土ニテ日ハ實也トイヘル音ト其義(注5) 同シ、ハ行ノ音ハスベテ、ハビコル意アリ ※案、ヒトイフ詞ハスベテ、ヒラク、ヒロガルナドノヒニテ、

同:6)

月 是亦自語なるべし、或説尽也、かけて皆つくる也、刘凞が釋名 (註6) に月へ缺也といへるに似たり、凡神代の言は今よりはかりがたし、(註7) ***

旦又自語おほかるべし、今みだりに其義をとくとも、あたらぬ事な

ツキト名クル也 時許ニテ月末ニハナキニ至ル、 ※案、月ヲツキト訓スルハ、即チ月ハ闕也ト同義、満月ハ僅半 コレカケツクルニ似タリ、

(同・7)

※案、光少シノ義、 少・小ヲシト訓スルハ、 賤ź 皴; 蜆;

ほハひと通ず、しハ白き也、星は日の光をうけて白し、下を略

す

(司8 ふかせなり、

類コレナリ

意はかりがたし 虚空よりふかする也、但上古のことは其名つけし

※案、カゼハカスヱ、 コ、ヨリカシコヘフクノ名ナラン、セハ、

セムナドノセナラン、セリコムノ義ナリ

信云、此説うがてり、くもハ上古の自語なるべし、或くもると云意。 よきもあり又ひがめるも多し、ことく、くは用がたし、よきを取、 なるか、但くもは母語にして、くもるハ子語なるか、凡仙覚が説。 **著「仙覚が萬葉の註に。くは内へまくりいる詞、もいむかふ義、篤(記・10)**

※案、クモハ、コモルノ義、クコー音ナリひがめるをすつべし

同:12

あり、又高山に霜なし、一説しは白也、もはさむき也、むともと通 霜 下にあるの義也、霜満、天などいへ共、かたちのみゆるは下に、(注3) 白してさむきなり

エアカル也、シモバシラナド徴スベシ ※案、シモハシラアメノ義、又案、白萌ノ義、霜ハ地上ヨリモ

雷(いかりてつちにおつる也(→解題4頁上段参照) ニ聚リ轟ク故ニ、カク名ケシ也、古文ノ雷ノ字 ⊗⊗ ※案スルニ、イカハイカル義、ツチハツドフ也、ツトヒ・トフ ノ反チトナルナリ、雲ノ中ニイカタテル其形、之ヲ望ムニ一所

説ニイカダチノ音轉、即怒リ立ツノ義也ト、又通ス

如此、亦證ト為ベシ

春。かすみたてハ、野も山もあらはに見えず、かすかに見ゆる アカソミ也 六和 帖訓 案スルニ、本ト日上ノ赤気朝霞暮霞ノ名(社区)

同· 28

瑕・蝦ノ字是ナリ、銭坫ハ瑕ノ本字トセリ、従フベシ ヨリ轉〆、春鶴ヲモカスミト云フナリ、段ノ声ニ赤キ義アリ、 (帖)上・物名・天部8「霞 ァカソミ也 朝ヤケタヤケ也、俗春

鶴ヲ霞ト云フハ誤リ轉セシ也」

(同・15)

きハけ也、きとけと通ず、気降也、ふを略す ※案、キリハクラムコルノ義、キリタツハクラミ立ナリ

(同・17)

雨とあられとまじるを云 寒 水あられ也、縦横二重相通の反なり、此類も亦多し。らを略す、

※六帖同説

ミゾレト訓ム」 爾雅註云、霰

冰雪雜下也、七見反、又作、羅南卷 」。 13 「霙」 雪相雑 也、音於驚反、文選雪賦師説曰 醴 | 」(江戸時代後半に (倭名類聚鈔)巻一・天部・風雪類第三12「霰 孫愐云、霙雨

同· 18 最も流布した所謂渋川版後印付訓本による)。

へるがごとし 吹からに秋の草木のしほるれバむべ山風をあらしといふらん、とい 山風ハあらき物也、又草木をふきあらす也、文屋康秀の哥に、

※アラシハ荒風ノ義、古言ニ風ヲシト云フ、富士ハ吹ク風ノ義・ ナリ、嵐ハ本ト梵語ニテ毘嵐婆ト書ク、又嵐婆トモ又藍婆トモ 書ス、元ト嵐ノ字ト相渉ラヌ也

梅^{*} 雨* たかざればのぼる気なくして、こしきの上より水気くだりてつゆと きの下に火をたきて気のぼる時は、釜の上の水気下へおちず、火を 春よりのぼりし陽気くだる時、なが雨ふる、たとへば、こし つゆハ露也、正月より四月まで陽気のほる、五月に一陰生ず

※言元梯ニ入梅 熟 梅実熟也(つ・44)なるが如くなれべ、五月雨をつゆといへるなるべし

同· 29

(帖)上・物名・天部18「虹」ニスヂ也、スヂ反シ、ノヂハ轉※六帖」ニスヂ也、スチノ反シ、シノ轉チ也にハ丹也、あかき也、しハ白也、にじハ紅白まじはれり

同 · 32

なべたとハ、そらのはたと云事也、そらのはたおりひめ也

※手ノ機が (梯) た・38 「織女 手炎

(上・二・時節・3~6)

る、又云、張也、草木のめ、はる也、初の説を用ゆべし 也、冬ハよろづなくなりしに、春にいたりて萬物發生して 有と な春 晴也、冬は陰気多く、春天ははれ多し、一説に、はる ハ ある

なき也、 明かなる也、秋天は清明也、或云緋也、草木あかき也、一説、 萬物秋に至り零落し、かれしぼみてなくなる、春を有と云

あつ也、あとなと通ず、夏はあつし

に對せり、是も初説よし

冬 ※春ノ草木ノ芽ヘルモノ、秋ニ至(注5) ひゆ也、ひゆは寒也、ひ・ふ相通

秋ニ至テ零テ空明ニナル反對トス、

義也 夏ノアツキト冬ノヒユル、是亦反對トスルナリ、亦二至二分ノ

同· 19

*字皆同し、六日のいは引音也、七日ハなゝか也、ぬとなと通す、八朔 月たつ也、二日ふたか也、かは日也、かゝやく意、其餘のかの

日のうい引音也、むゆか・やをかと云ハひが事也 ※たつハ、春たつ・秋たつのたつト同じく、其日よりして其月(注音) ニ改まり立つの意なり

らひ出る也 ※古事記ニ猶豫を伊佐用布ト訓セリ、 コノ義ナリ

既望 十六夜の月也、いざよふハ、やすらふ意也、日くれて少やす(同・21)

同:23、24 ひるのいまだあさき也

ひきくある時也、一説足立也、夜いねたる者、足たちておくる也、 あはあさき也、したハ下也、日のいまだあさくして、天の下に

前説を用ゆべし

※アサハアシタノツマリニテ、一語二分也、アハ明ノ義、シタ ロタヘノロ・ヘヲ畧ス、明白妙ノ義ト又通ス フハ過去ノ詞、明ケキリタルノ意、サト云フモ同シ、一説ニシ ハ詞ニテ、サツハリト明ケタルニテ、平旦爽朝ノ義、シタト云

(同·26 27

56

ひのほる也、中天に日のほる也、中略也、 日は母語也、 ひるハ

夜 よるはいる也、日入なり、いとよと通ず、又昼出たる人、夜ハ 子語なり、一説此時物のうるほひひるゆへに、 ひると云

一所へよる也、よるハあつまる意、前説よし ※ヒルハ開張ノ言、ヨルハ合閉ノ言、ヨト云ヒ、ヒトイフ、 即

日夜ノ訓ルハ、ヒラクノハタラキヨリ、ヨルノハタラキ也、天

地ノ気ノ開閉ヲイフ也

夜居なり、夜いまだねずして居る時を云

※ヨヒハ夜端也、ハシノ反ヒ也六占上ノニオ カノ反ハ也同上 (帖)上・物名・天部29「夜 イトアル也、イト反ヨ、ヨハ、ヨ ヨハハ夜深也、フ

ル説ハ非ス、ヨナノくハヨニハノく也、反ナ、アサナユフナヲ ヒハヨハシ端也、反と、ヨタ、ハヨウタ、轉也、タ、ヲ直トス 万葉集ニ朝魚夕菜トカキタルハ、仮字ナリ、ソレニヨリ惑フへ

フカ夜也、ワハ、サヨハマヨ夜也、マトサト通スル例多シ、ヨ

カラス

(司)

※ヲトツヒハ遠ツ日也占(六占)のあと也、つはやすめ字也、俗にハおとゝひと云、つととゝ通す もとよめり、おとハあとなり、あとおと通ず、あとつ日なり、昨日 (注3) 「日本釋名」引用の万葉歌の「おとつひ」の左また右に掲げた「日本釋名」引用の万葉歌の「おとつひ」の左

(帖)上・物名・天部46「一昨日横に「前日万」と書き入れがある。

タチツヒ也、

万葉集前日ヲ云

明" 日~ 同 33 あすとハあかす也、けふあかして後の日也

※アスハ明ケ去ル也六占 (帖) 上・物名・天部43「明日 アケサル也 去 サル反ス」

去々年(萬葉にハ前年とかけり、あとゝしなり、去年の あと の年*・・。(注20) 同· 35

也、をとあと通ず、一昨日をおとつひと云が如し、此外に も 説 し、不可用

(帖)上・物名・天部41「去去年※六占 オト・シハ遠チ年也」 ヲチトシ也 万葉集前年ヲ云

フレ

" (同 · 36

去年 こずの年也、さりて重ねてこざるとし也、そとすと通ず ※コゾハ越エ去ル也六占 (帖) 上・物名・天部40「去年 コエサル也 山越 去

説、へハ世也、へとよと通ず、いにし世也、此説も又よし しへなど云がごとし、今案、いにしへいぬる也、去の義なり、一 同 37 神代直指抄云、いにしハ去ぬると云義也、へはうつほ字、むか

同 38 ※イニシで也 六占 (天部・35)

ハ、むなしき也 むなしといふ詞、横の通音にてかとなと通ず、過去たるあとの ※ムカシハ 児越 歟、 或云ムクシ

4月1世六占 (天部・37)

同 39

あつまりておほき意なるべし、世に出る、世をのがるなど云を以し 神代直指抄に、よるといふ義也、篤信が云、世とは、人のより

※ャドリ也 六占

(帖) 上・物名・天部38「世 ヤドリ也 ヤト反ヨ」

日辻也、日の西へゆくつじ也

※日傳ジ □ シハ御□也、ツタヒツタフ、**ノ反ツ、タヒノ反シ也

同·49

とかく、世にすめバ常にうき事のみ多し、人生難、逢。開、口笑」とい 浮世 世変のさだめなきへ、水の上にうかべるが如し、一説に憂世

※唐詩、又得浮生半日閑なとコレナリ、浮世といへる漢語へ、へるが如し、からの書にも浮世とつゞけり

定め無き世をいへるものニて、此邦ニてうきよといへるに當た るなれハ、和名のウキョハ憂き世の義にて、義異なりとす

東「日頭なり、らの字を略す、日のはじめて出る所、かしら也ぱっぱる(注24)(上・三・地理1~4)

※案、日赤シノ義

南 西 萬物皆みゆる意、日の南にある時、あきらかにしてみな見ゆる いにし也、日は西へいぬる、日のいにしと云意、いを略す

直指抄云、北方ハ其色黒し、上古にハ黒き色をきたなしと云、

也

きたるの意敷、冬至子の半。一陽来復すれば也 ことに明か也、或又、北ハ陽のはしめて生ずる方なれバ、万物いき なしの文字ハ無の字の義にハあらず、語の助也、○直指抄の説、ま

※ 東 四方ノ名、皆日ニ取ル、右六占 日向ヒシ也、西 イ ニシ 也 **、** 南 "ナ"ル也 北 キハタカ也、際、高、

タカ反タ、キハタカハ、日ノ往ヌヲ云フ、四方ノ名、ミナ日ニ ト訓メリ、南 "ナール也 冬夏ミナ日ヲ見ルヲ云フ、北キハタカ也 (帖)上・物名・天部・土類2~5「東 ヒムカヒシ也」 出ル日

牧・ ・ ・ 56 ハ

取ル

※案、馬ノキタリ居ル所也 きはきつく也、馬をはなちおく所を、人のきつける也

(上·四·宮室8~10) みやハ御屋也、 御はたうとぶことば也

やどる意

いは居也、ゑハよし也、いよしと云意、よしとゑと通ず、日吉

をひゑと云、住吉を住の江と云の類也 ※案、ヤハイエノ緩急、ヤドルハ家ニ留ル也、

ヤスムハ家ニ住

(上・五・地名12)

其妻死ぬる時に鏡をさして曰、われ死して後、我を思ひ慕ば、此か 舊記曰、昔此國の狩人、其妻にはなれてなげきかなしめり、

るか如し、其かゝみを祭りて神とす、其社の有国をさかみと云、さ ムみを見るへしと云、妻死して其かゝみにうつるすかた、亡妻をみ ****

かハすがた也、さかみとハすかたを見る也、此神即足軽明神也

※案、武蔵相模、ムサカミムサシモノ畧、ムサハモサ也、平原

キョ下ト云也 草莽ヲモサト云、此二国少山多原、故名、上国ニ近キヲ上伝遠

しなるべし

吉備の国と名付しハ、上古の時吉備津彦の居給し國なれバ、名づけ 備前備中備後 昔三國をすべて吉備の国と云、後代三国にわかつ、

※案、吉備国トハ、黍ノ嘉植スル所故名

(同· 21)

上巻に見えたり 淡路 あハわれ也、 はちハ耻也、わかはちと云意、其事日本紀神代(注答)

同:27 ※案、海ノシホ路アワキ也、内海ユへ也

壺岐 ゆきなり、いとゆと通ず、浪高くして潮の白き事、雪のこと

し、是古人の説也

※案、壹岐、行留リノ所ナレバ也

也、こがねへきがね也、きとこと通ず、印子へ金のよきを云由、沈、《光》(注答) 金(かたくねる也、石中にあるかねのまふをくたきて、かたくねる。** (注26) (中六・水火土石金玉17)

存中筆談にかけり、和語にあらず

※案、堅音ノ義

(同十二・蟲類5)

※案、セミハ此蟲ノ声也、蟬字未渡前ヨリ〆、蓋セミノ名アル(注8) (注8) せみハせん也、むとみと通ず、音を以訓とす、此類多し

ナルベシ

鯉 こいはこえ也、其身こえたり、又其味諸魚にこえたり、ホーイメモラコ) (同十三・魚類1) **※立之案、こひハ恋の義、常に二魚雌雄相比行す、ゆへにこひ(注33)**

鮒 養て食するに、骨やはらかにしてなきがごとし、骨なし也、(同・2)

と名つく

とふと通す、ねを略す ※立之案、ふなハふしうをなり、なとハうをの事なり

海鰻 唐音なり、和語にあらず(同・10) 海鰌 黒白也、其皮黒く其肉白し、順和名抄には、くぢらとあり、イット(注%)メーット。(同・12) **※立之案、はむなり、牙歯はげしくしてよく物をはむ義なり**

しとちと通ず ※立之案、くちひろ之義

(南・4))。(注38) (南・19)) 人をやくに似たり、むかし或人後妻にまよひ、讒を信して、其前妻

ほ

事をしりて、ひそかに其子をかくしつかはし、其子のかはりに、つ のうめる子を、其家のやつこに命じてころさしむ。やつこ其罪なき

なしを多くやきて、子をころして火葬したるよしを、其父につげょ

る、それよりして、此魚の名を、子の代とぞ云ける、子 の か は り

しやくらん、とよめり 也、古哥にも、東路のむろの八嶋にたつけふりたがこのよにかつな

※立之案、このしろは、うろこのしろきなり

鰷魚 あゆる也、あゆるとハおつる也、

ふるきことば也、

春ハのぼ

同· 65

り、秋は川上より下へおつるもの也

※案、荒行ノ義

。 (司· 24

鱖魚。さけへ裂なり、其肉片、にさけやすし、こと魚にかはれり、 はらゝ子ハはらにある子なり、あるのるとらと通ず

と魚ニ似す、ゆへにはゝらこと名つく ※立之案、はゝらハ、はら~~の略、此魚子、粒ニ相分るゝこ

らひかるもの也、故に名つく、一説に、あはでひらく也、ふたなき あはでひかると云事也、あハびは其から片貝にてふたなし、か

者岩添之畧

(同・6)

あはでつねにひらけり 万葉集巻七寄玉歌云、石著玉、傍訓曰アハヒタマ、因考アワビ 立之案、あいではふの義

水鳴也、水中にありてなくもの也+*(注望)

※立之案、みな・にな一音なり、になとはになふなり、殻を荷

ひありくゆへ名つく

(下十七・木4) はやす也、木を多くはやすなり(注43)

※立之曰、はやすハふやすなり、一音の轉なり、すへてハヒフ ヘホハ發生・出張の意あり、ひらく・ふくれる・はびこる・ヘ

めぐる・ほきたつの類是なり

まりて、欵冬をやまふきとよめり **棣棠花** 山にありて、其花のいろ欵冬のことし、日本にむかしあや***。* 共ニ柔軟垂下シテ地ニ至リ、或ハ水ニ臨メリ、又欵冬ヲヤマブ ※ヤマフキハ、ヤマハヒ木ナルベシ、ハヒノ反フ也、此者枝幹 キトイヘルノ古言ハ、即山中自生フキニメ、ミヅブキニ分ツノ

-- 60 **--**

すくなく、けふり目に入ていたまず、たき火にあたりてよき木なり 同 68 もえの木なり、凡の木皆もゆ、されども此木よくもえてけふり (注写) ※エノキハ枝ノ木ナリ、小枝繁茂スル木ナレバ、カク名ツケシ

※ホ、ハ赤キ義ナリ、此木嫩葉紅芽愛ス可シ、故ニ名ツク、

* ↓同· 70

元言梯同シ(注5)

(同二十二・雑器32

※目座也和訓六帖 をくらと云、あたまをおくくら也 (注49) ※日座也和訓六帖

(同二十三・虚字48)

※アヲハアヰト同シク、藍ノ色ヲイフし。くを略せり、しハ助字也、あかし・白しの類なり、は知のでは、あかし・白しの類なりではなる。 はほそらをあふけハ其色あをし、あふく・あをし、其音 ちか

(同 • 49

※キハ子ノ義、卵中黄ヨリ出タル称ナルベシ 次にこげたる色ハ黄也、こけいろ也、けときと通音也

同· 50

赤あきらかなる也、朱ハあかなり

※アカハ明ケノ色ナリ

(同:51

※シロキヲシロ、、、ハ明白ノ名ナリ1 しるし也、よく見ゆる意

同· 52

※クラキヲクロ (注52)

(注2)「自語ハ天地・男女・父母などの類、上古の時自然に云出やすくきゆるを雪とするの類多し」(「日本釋名」凡例第一項一六)。ふみとし。あはうみをあふみとし。きゑをけとし。見へをめとし。かれとし、かれをけとし。ひらを葉とし。とをつあはうみをとをた

(注1) 「反語ハかな返し也、はたおりを服部とし、かるがゆへを

ず」(同第一項—一)。

せる語也、其故はかりかたし、みだりに義理をつけてと くべ から

(注3) 「ギミガマ」は「日本国語大辞典」や前田勇氏の「江戸語

考節用集」言辞門に「―(吟)味我慢常終」とあるのを早い例としす語である。江戸期の辞書類では、享保二年刊の「和漢音釋書言字大辞典」に説明があるように、ロやかましく咎めだてをする様を示

れも語義の説明が無いか無きに等しい。補俚言集覧」による)「吟味我慢」の表記が示されている が、いずれ俚言集覧」に「ぎみがみ」のかたちで掲出され(活字本「増海内蔵」等、幕末に至るまでの節用集の幾つかに採録されており、て、嘉永四年の「 韓輔大全早引節用集」や文久三年の「江戸大節用

として、源・溝・汀・港を生ずる類を子語と云」とある。また同じして、晦・朔を生じ、火を母字として炎・焰・埃を生じ、水を母生ずるを云、日の字を母字としてひる・曇・光を生じ、月を母字と生ずるを云、日の字を母字としてひる・曇・光を生じ、月を母字とり(注4)「日本釋名凡例」第一項の七に、母語と子語と を 説明 し

く凡例第四項に、「母語を用て子語をとくべし、子語を以て母 語 を

くととき、くもるゆへ雲と云の類、是子語を以て母語をとく也、あ じけれべひと云ととき、日とハ物日にあたればひるゆへに日となづ やまり也」と言う。 とくべからず、火は天の日をかりてひと云なるを、日ハ地の火と同

項に、「日實也、光明盛實也」とある。 (注5) たとえば明暦二年の和刻本「新刻釋名」巻一・釋天の第二

也」とある。 (注6)同「新刻釋名」巻一・釋天の第三項に「月缺也、 、満、則缺

語多かるべし、又ハ古人の語をつくりし意、今よりはかりがたきゆ (注7)「日本釋名」凡例第五項の中に、「ときがたきは上古の 自

て。注し侍へるなり。雲井と云ハ。大かた霞ハ天の気。霧ハ地の ぞと。たづぬる人あらんときにハ。ことかたき人もあるへきにより れバ。みな人も心得たるやうにハ侍へれども。若又いかなればいふ (注8)「由布左礼波久毛為多奈毗吉 くも井とへ。帯にいふ詞へに、ときがたしとしるべし」とあり。→注2。

伴池主がこたえた「 敬 和 立 山 賦二 首幷二絶」中の賦(同四〇短歌」(国歌大観番号四〇〇〇~〇二)に対して、翌二十八日に 大 十七、天平十九年四月二十七日に大伴家持が詠じた「立山賦一首幷 本「萬葉集註釋」巻十七による)。 すなわち当該個所は、萬葉 集 巻 んハ。雲井といハるべき也」(題簽に「覺萬葉集抄」とある無 刊 記 あれ。其ほどはるかにへだゝりて。山川の気かさなりあつまりたら むかふ義。これ雲のすがた也。このすがたへ。小雲にもみなみゆべ 気。雲へ山川の気なり。くもといふ。くは内へまくりいる詞。もハ** し。井と云ハあつまることば也。しかれバたかくもあれ。とをくも

> は貞享四年八月に「萬葉仙覚註」を読んでいる。 る注である。なお益軒の読書記録である「玩古目録」によれば、 (注9) 「雲 こ 競 、日月ノ光・ソラノ色ナトコ Ŧ ル ヲ 云 こ

(「和訓六帖」上・物名・天部7)

の時、三体詩絶句の口授を仲兄存斎に受け、朝夕復読し旬日の間に る)。なお、この語句はしばしば使われるところであり、直接の 全集」所載の「益軒先生年譜」によれば、彼は寛永十五年数え九歳 典を必ずしも三体詩に限定する必要はないかもしれな い が、「益軒 「月落烏啼霜満」天」(寛永二十年版「増註唐賢絶句三體詩法」によ (注10) 三體詩・七言絶句・実接9、張継作「楓橋 夜 泊 起

(注11) 「霜」白」(「言元梯」し・⑷)。 (注12) 「霞 唐韻云、霞赤氣雲也、胡加反称美」」(「倭名類聚鈔」

(注1) 萬葉集叢書第十輯「萬葉学叢刊中世篇」所収本によれば、 (注13) 「嵐 荒風」(「言元梯」あ・13)

巻一・天部・雲雨類第二―2)。

当該個所は「詞林采葉抄」第六の第13項「七夕姫」の一節。但し勿 たなハ空也、そらに引也」と説明する。 論引用文と異同がある。「玩古目録」によれば、彼は延 宝 八 年 に 「繋」の項あり、「雲・かすみのたちなびく也、ちを略す、一説、「繋」の項あり、「雲・かすみのたちなびく也、ちを略す、一説、 「詞林采葉抄」を見ている。なお「日本釋名」巻上・一・天象37に

(ふ・41)、「和訓六帖」上・物名・天部では、「春 、芽張ルヲ云フ、春サリ秋サリハ、春ニナリ秋ニナリ也」(21)、「夏 温」(な・49)、「秋 朱 草木紅葉ノ義」(あ・4)、「冬 冷」 張ナリ、草木

(注15)「言元梯」では、「春 張 艸木芽ヲ張ル義」(は・52)、

夏,

○三)の一節「由布左礼波久毛為多奈毗吉」の「雲井(居)」に関す

「「和訓六帖」上・物名・天部47)。 「和訓六帖」上・物名・天部47)。 「和訓六帖」上・物名・天部47)。 「和訓六帖」上・物名・天部47)。 「和訓六帖」上・物名・天部47)。 「和訓六帖」上・物名・天部47)。 「和訓六帖」上・物名・天部47)。

和事始」巻一・天地門8「國」)。

(注19)巻六・一○一四「前日毛 ヴァキャッキ 弾にするすべた(注18)「前日 遠日」(「言元梯」を・26)。 ますことには、「後年又屢見」にという。

文。

注本等では「人世」は「塵世」)。

(注2) 「前年 遠年」(「言元梯」を・43)。

(注2) 「前年 遠年」(「言元梯」を・43)。

(注2) 「前年 遠年」(「言元梯」を・43)。

(注24)「東 日首」(「言元梯」ひ・76) ・間適の結句にも掲示されている。 ・間適の結句にも掲示されている。 ・間適の結句にも掲示されている。 ・間適の結句にも掲示されている。 ・間適の結句にも掲示されている。

原好古編、元禄九年冬至貝原驚信序、元禄十年刊〔癲和漢事始〕「大也。故に名づけて淡路洲と云。淡路とハ。吾恥と云意とかや」(貝む時にいたるに及て。た淡路洲を以て胞とす。意によろとひさる所で神代巻にいはく。陰陽始てみとのまぐばひして夫婦となる。こう「神代巻にいはく。陰陽始てみとのまぐばひして夫婦となる。こう

名・金類1)。「金 黄金」(「言元梯」・こ⑴)リト云フニテ見ルヘシ、コガネハキカネ黄也」(「和訓六帖」上・物リト云フニテ見ルヘシ、コガネハキカネ黄也」(「和訓六帖」上・物(注26)「金 整 鞭 カタ反カ、ネレ反ネ、カタネレハ古鉄ヲネ

云」(「大和本草」巻三・金玉土石1・金 昭和七年白井光太郎考註中ニマシリ有」之ヲ、其石ヲクタキユリテ金銀ヲトル、其石ヲ 礦ト(注27)「礦ハ時珍云粗悪也、五金皆有。租石」街」之金銀ナト 皆石

本による)。

以よこよる。 金也、得」之者至多、天下謂『之印子金』是也」(「四部叢刊續編」所中及渓澗之間、往往得『小金餅、上有『篆文劉主字、世傳、淮南王薬(注28)沈存中「夢渓筆談」巻二十一・異事10に「壽州八公山側土

シタル是真金ナリ、器ニ製スヘシ」(「大和本草」巻三・金玉土石1 主ノ字アリト云、或曰、印子金猶鑞雜レリ、非二精金、山金ヲ精 「印子金、精金ナリ、古中華ヨリ来ル、其形餅子ノ如シ、又他ノ器 製セルモアリ、沈存中カ筆談ト云書此事ヲノセタリ、上ニ篆文劉 煉

「蚱蟬

奈波世美

説者謂世美者蟬之音呼与、蟬訓之美同例、

余謂

「自然ト金ノミ塊ヲナシ氷柱ノ形如キハ黄牙ト云、俗名インス、唐 「印子金 出』于沈存中筆談:」(「倭爾雅」巻五・宝貨門7)

品ハ下ナリト云」「天生牙俗名インス、自然ニ笋ノ状ノ如ク長 ク カ タマリタル金ヲ云、古へ和州大峯山中ニ生セシト云フ」(「本草綱目 ノ鑓鈕ノ如クス、重五十錢ナルアリ、百錢ナルアリ、色ハ美ナレモ 山ニテ印子金ト云トハ別ナリ、コレハ唐山ノ通用金ニシテ、形紙門

啓蒙」巻四・金石之一・金)。 五音相通によりて名づけし語也、上を轉じて君とし、高を轉じて竹(注2)「日本釋名」凡例第一項の二に転語を説明して、「轉 語 は (注29)「日本釋名」凡例第一項の二に転語を説明して、「轉 語

ず、蟬をせみと訓じ、頓をとみと訓ず」云々と計十八の例をあげ、 て和語となせり、ふみハふんの轉語なり、錢の音を轉じてせにと訓 轉語の内、音を轉じて和訓とする類、文のこゑを轉じてふみと訓じ 類あり、後にしるす」とする。そして同第七項で、「右にしる せ し とし、黒を轉じて鳥とし」云々と述べ、「旦音を轉じて和訓と せし 「此類皆音を轉じて訓とせしなり」とまとめている。

呼"世毘世毘」者、俗亦呼、蟬為"世毘、蓋以"鳴聲」名也、 略)」(「和訓六帖」上・物名・人部・虫類18)。→解題52~53頁。 音之訛、恐不、爾」(「箋注倭名類聚抄」巻八・蟲豸部・蟲名38)。 (注30)「蟬……新撰字鏡、蟬・銵並訓』世比、按関西有、蟬、 ソノ鳴声ナリ、田舎ニアリ、声セミノ〜ト云フガ如シ(以下 或曰、 、聲如 蟬字

> 不然、 **伊自伊、亦通、宗波者仁波之音轉、此蟬多在人家園庭間、亦呼自、亦通、宗波者仁波之音轉、此蟬多在人家園庭間、** 耳、或曰美者牟之之縮言、世者之称之衣之急呼、者、自是一種、然蜂與耳、或曰美者牟之之縮言、世者之称之衣之為呼、今於鄭中有呼之称之称 年十月枳園書写本の転写本による〉)。 俗呼阿夫羅世美者是也」(森立之著「本草經薬和名攷」中〈萬 延 元 世美者。皇國之古言、盖自蟬聲而得之名与、彼土名蟬自相合 故名、今

見せ消ちにし、各々の字の右横に「ヒ」「ひ」と朱書する。 「鯉」七巻食經云、鯉魚上音里、」(「倭名類聚鈔」巻十九・鱗介部

(注31)底本振り仮名「コイ」と本文「こい」の「イ」「い」を朱で

書べし、いの字ゐの字書くべからず」(「和字解」)。 (「和字正濫鈔」巻二・ひ)。「こひ鯉 いひ飯 おひ甥……皆ひの字 龍魚類鯉4)。「鯉」こひ」によせておほくよめり。こい、こゐなと書へからす」。龍魚類鯉4)。「鯉」こひ」和名。味のよくて人の恋ひしたふ故の名歟。古歌に恋」 「訓蒙図彙」や寛永八年版「新刊多識編」そ れ に「倭 爾 雅」等は なお、節用集類の大半や倭玉篇・下学集等は「コイ」、寛文版 の

恋慕也、 六年十月成ル〉)。 鯉之目、亦取此義耳」(森立之「本草經薬和名攷」上〈上巻は 安 (注 32 此魚每雄与雌必相雙行、故名、盖鯉之為言儷也、 「鯉魚膽」本草和名、古比、按古比者古比志多夫之義、謂

巻十三・海魚)。「海鰻 ハ魚ナリ」(「和訓六帖」上・物名・人部・魚類30)。 (注33) 「鮒魚 (注34)「ハモハ海鰻ナリ、唐音ナリ」「唐音ハモ」(「大和本草」 卧魚」(「言元梯」ふ70)。「鮒 字ノ唐音轉スル也、韻学私言云、海鰻日言 フハソノ字音、ナ

字遣」は「こひとい共」となっており、仮名表記にゆれが見られる。 **ゐ」、「改正増補多識編」は「コイ」、そして所謂慶長版の「仮 名 文** 「こひ」「古比」「コヒ」、元禄八年版の「頭書増補訓蒙図彙」は「こ 古来有雙

唐音之畧歟」(「和漢三才図会」巻五十一・魚類無論24)。誤也」(「訓蒙図彙」巻十四・龍魚50)。「海鰻 和名波無、俗云波毛、誤し」(「和訓六帖」上・魚類17)。「海鰻 今按はも、盖唐 音之法を

綱目啓蒙」巻四十・鱗之四一3)。 (注35) 「觜尖長クメ歯多シ、巳ニ捕タル者モ能人ヲカム」(「本草

(注36) 「漁館、之最大、者、泥鰌魚之最小、者、雖二大小不。同、其、代注36) 「漁鰌魚之最大、者、泥鰌魚之最小、者、雖二大小不。同、其、状畧の「注36) 「漁鰌魚之最大、者、泥鰌魚之最小、者、雖二大小不。同、其

和名送ヘリ」「(れる假名文字使蜆縮凉皷集」下)。大魚、雄日」鯨魚、雌日」鯢音幌、和」。「くちら 鯨 鯢 一云クジラ大魚、雄日」鯨魚 魅音観、和」。「くちら 鯨 鯢 一云クジラー。「倭名類聚鈔」巻十九・鱗介部・龍魚類6「鯨鯢 唐韻云

を「子ノ代出焼」いたという型である。

る。なお「神道集」巻六・三十四「上野国児持山之事」等もこの魚

ろにあせあゆるこゝちぞしける、とあり。あせのながるゝ事なれ(注4)「あゆる。物の落る事を俗にあゆると云。枕草子に、すゞ(注3)『鰤』甲台。竹取談ニ子代』(「言元梯」こ・94)。

語7)。なおこの語は、益軒の生地福岡県をはじめとする九州 各 地 の方言として報告がある。 ハ、むかしよりかくいへるなり」(貝原好古 「諺草」 巻六・安・俗

水中岩ナドニ取ツキ合スルヲ云フ」(「和訓六帖」上・魚類61)。 アハスミ也 斉だ

巻六・蟲介56)。 (「和訓六帖」上・魚類4)。 「蝸嬴 (注42) 「河貝子 ボッナセ 水中ニ鳴ク故ニ云フ、ニナハ轉ナリ」 螺鰤同、或云尖螺」(「倭爾雅」

弥茂」(「言元梯」は・97)。 (注4) 「林、ヤス也」(「和訓六帖」上・天部・土類37)。「林・

ヲヤマフキトス、皆アヤマレリ」(「大和本草」巻十二・木之下・花 (注4)「棣棠……順和名欵冬ヲヤマフキト訓シ、朗詠集ニモ欵冬

木7)。

字,不,少、後人不,辨,之、公任朗詠載,教冬、是已誤矣、况、其餘字,而書,之耳、非,以,似,、酴醿,者為,、数冬也、万葉多借,用日,也未布岐、是同和名、而異物也、古人於,,万葉中,多詠,,其花,因,也, 故以,,教冬,在,睦地、曰,,也未布岐、又一種花似,,酴醿,者、亦之名、故以,,教冬,在,睦地、曰,,也未布岐、又一種花似,,酴醿,者、亦之名、故以,,教冬,在,,睦地、曰,,也未布岐、又一種花似,,除醿,者、亦之名、故以,,教冬,在,,睦地、曰,,也未布岐、又一種花似,,除醿,者、亦之名、故以,,教冬,夜末布岐、又称,,於保波、今案布岐、又案, 黄有,美豆布岐、数冬 哥 乎」(寛永八年版「新刊多識編」巻二・湿草部。なお益軒は「増 している〈「玩古目録」延宝六年の条〉)。なお「廛添壒囊鈔」巻九― 補多識篇」の方については「不好書也、不可再見」ときびしく批判 「数冬 夜末布岐、又称:於保波、今案布岐、又案 黄有:美豆布

「棣棠花」(「倭爾雅」巻七・艸木門)。 〔注45〕「ヱノ木ハ焼テ烟スクナク能モユ故、 タキ火ニ用ユ」(「大

(注46)「榎木 校木 杂茂木也」(「言元梯」 江・15)。和本草」巻十二・木之下・雑木42)。 、者赤之義与保、都岐之保、同、此物嫰葉紅色、 「厚朴 今俗呼保、乃岐者是也、

漸大而変青色、

保

如槲葉、故名与(以下略)」(「本草經薬和名攷」中)。 天類座」(「言元梯」ま・11)。

人部・衣服付褻器42)。 メ ノ ク ラ 也 座 眠ルタメノクラヲ云フ」(「和訓六帖」上・

十六・草43)。「藍 (注50)「藍)あいはあをいろ也、をろを略せり」(「日本釋名」下 青ニ同シ、天色トモ云也」(「言元梯」あ

苼^

250 (注 51) 暗」(「言元梯」く・19)。 明」(「言元梯」し・22)。